

人文地理学における論文作成への一つの思考方法

大 嶽 幸 彦*

(平成2年6月11日受理)

要 旨

本稿は、人文地理学における論文作成への一つの思考過程ないし思考方法について考察を試みたものである。論文の結論において最も大事なことは、従来言われていないことを考え出すか、通説を論破することである。そのためには、仮説から検証し、またフィードバックを通じて仮説検証のプロセスを何回も繰り返す思考手続きが必要である。本論では、実例を挙げながら、その問題を論じた。

KEY WORDS

Hypotheses

仮説

Verification

検証

Method of Thought

思考方法

Human Geography

人文地理学

1. はじめに

筆者が、この十年来一貫して考えてきたことの一つは、さまざまな学問領域の中において地理学者は如何にして形成されるかという問題であった。というのは、人は最初から地理学者として養成されたものでは決してなく、偶然地理学を選んだことから徐々に、地理学者への道を歩んできたのではなかろうかと考えたわけである¹⁾。確かに、大学の地理学科に入学し、一般地理学(系統地理学)、地域地理学(地誌学)を始めとする研究領域を学んで、地理学的素養を積んだことであろう。しかし、研究の細分化の進展と共に、地理学から次第に遠ざかる研究者の数が少なからぬ現在、地理学科卒業をもって地理学者が即、誕生したとは決して言えないのである²⁾。筆者は地理思想に関する諸論稿の中で、日常、地理学を意識しないできても、旅に出て鋭い観察眼と地理的思考の持主であり、丹念に記録を取れば、一時的にせよ如何に地理学者に早変わりしたか、いくつかの事例を検討したことがあった³⁾。もち論、地理学者への形成 Formation は地理学の論文を絶えず書き続けてゆくことにある。そこで、本稿では、地理学の中でも特に筆者の専門である人文地理学に限って、論文作成への一つの思考方法を具体的に考察してみようとするものである。従って、本稿で問題とするのは、いわゆる論文の書き方等についての技術的議論ではなく、人文地理学における論文作成へ至る一つの思考過程ないし思考方法について、若干の考察を試みてみようとするものである。

さて、わが国で地理学(者)があまり評価されて来なかった事を示す指標の一つは、高等教育における教官ポスト数の少なさであろう。1990年秋に上越教育大学を会場として日本地理学

* 社会系教育講座

会秋季大会が開催されるのを機に、会員名簿の吟味がなされた。筆者の試算によれば、会員数約3,000名のうち、国立大学380、私立大学319、公立大学48、短大・高専104、その他9の計860に過ぎない。地球と地表面に生起するあらゆる事象を研究対象とする自然地理学、人文地理学、地誌学、地理教育等の分野を含み、技官・助手以上、講師から教授までの教官数であるゆえ、地理学領域の広大さを考える時、ポスト数が他の学問分野に比べて如何に少ないかが理解されよう。大学における地理学教官のポスト数が少ないのも、「幼少期にこびりついた地理の悪しきイメージを有する人士は、国家予算の配分権をにぎる者はおろか、周囲の人々でさえ、容易に認識を改めようとししない」⁴⁾からである。時に例外もあるが、大学の文・教育・理学部等にかろうじて2人ないし3人のポストを確保しているのも、大学が教員免許状に必要な単位を与えていることと無縁ではないのではなからうか。教員免許状に必要な地理学（地誌を含む）最低6単位を出すためには、1人以上の専任教官を置かなければならないからである。現に教職課程を設置しない大学・短大には、地理学者は存在しないことが多く、地理学者はこの厳しい現実に直面しているのである。

地理学の研究領域の広大さに比べて、研究者（小・中・高の教員も含む）の相対的少なさは、研究の発展に関しても、影響を与えずにはおかない。その点に関しては、拙著『国際化時代の地理学』の中で、既に次の点を指摘したことがある⁵⁾。1980年時での指摘ではあるが、10年経過した現在でも、その大要は何ら変わっていないと思われる。

それに対し、日本はまだ相変わらず文明開化の時代であるから、欧米の新しい研究分野の先端を素早く取入れ、追試をして論文を次々に量産してゆけば、いち早く狭い領域の専門家になれる。他の領域の多数の専門家と質で比較することは困難であろうから、論文の数という量でのみ教授ポストをめぐるべく競いがちである。また、日本人は流行を追うのに敏感であり、その時その時の花形分野に殺到し、それまで研究の進んできた他の分野は、閑古鳥が鳴くということになる。……中略……地理学の間口は広いのに相対的に研究者が少ないので、時の花形分野にのみ殺到しては、日本の地理学全体の発展はいびつなものになる。

上記の点に関連し、西川 治は日本地理学会会長演説の中で、地理学者はとかく伝来の概念や道具などを洗練せずに、次々に新しそうな方法を十分吟味することなしに取り入れては、それを巧く使いこなせぬうちに捨ててしまうと指摘している⁶⁾が、自戒の意味もこめて同感である。次に、本稿の主題である人文地理学における論文作成への一つの思考方法について、何故ここにまとめるに至ったか、その動機を書き進めることから論議を開始したい。

2. 人文地理学における論文作成への一つの思考方法

2・1 論文の必要条件

一般に、論文が作られる前の現場、いわゆる著者の知的奥の院は誰しも容易に見せたがらぬものの一つである。室内実験のデータから論文を作成する研究分野においては、同業者に実験室ものぞかせないと聞く。実験装置を見れば何をテーマに先端的研究を進めているか、およ

その見当がつくからである。活字になった後の論文の、序論、本論、結論へと首尾一貫し、整合性に富む論述に至るまでの過程は、論文を書くことの苦しさを知る者にとって簡単には公開できぬものでもあるからである。従って、初心者は完成した論文ばかり読んでいても、問題はつかぬ、ただ混乱しているばかりという状態の方が、研究の当初、実は長いのである。研究への道は手取り足取り教えてくれる程、甘くないのは確かである。しかし、誰しもが研究論文作成への思考方法を公開せずにおけば、後から続く者は、われわれが研究者への道を志した頃の無駄な時間とエネルギーを浪費することになるし、論文と呼ばれる類の質的内容・水準を自己流に解釈し、調査して書けば実証したことになるかの如く、これで善かれと妥協してしまうことであろう。先に述べた如く、ここでは論文と呼ばれるものには何が必要で、どのような内容・思考手続きが盛り込まれていなければならないか、管見しえた文献を基に、若干の考察を試みてみたい。

ところで、気候学者の関口 武によれば、すぐれた研究論文とは次のような観点が不可欠である⁷⁾。

- 1) 新しい論理構造、思考体系を提起し、それによる事象の解明
- 2) ある程度確立している論理構造の枠の中ではあるが、観測、測定等によるデータをつくり、それにより、より精緻な論理構造を進展させる。

関口 武はこのいずれかの役割を果たせれば良いとしているが、欧米での新しい研究動向の摂取に熱心であったわが国の現状では、1)よりも2)の方向を採り勝ちであったことはまず理解されよう。筆者自身は研究のオリジナリティー（独創性）に関して、

- 1) 問題提起のユニークさとそれへのアプローチの新しさ
- 2) 新たな研究法の提唱
- 3) 原資料・データの吟味による新解釈・学説の修正

これらのうちのいずれかが果せば、研究のオリジナリティーは少なくとも出せるものと考えている。そのため、研究者にとって必要な資質とは、観察力、洞察力、独創的な問題発見能力と、その解明に必要なデータ集積に要する強い意志の集中力や持続力である⁸⁾。人文地理学においてもデータ収集は測定したり、図化するに値する事象の背景となる諸理論によって影響されるのはもち論である。

次に、地域経済論的立場をとる経済地理学者の高阪宏行はみずから国際雑誌に投稿した4つの論文を取り上げ、どのようにして自己の独創的研究が生み出されていたかという論文の作成過程を明らかにした。高阪によれば、独創的研究を行なうには、次のような段階を通して研究が進められるという⁹⁾。

- 1) 学問の動向をとらえる。
- 2) 従来の研究から問題点やアイデアを探す。
- 3) 問題点を解決し、またアイデアを育み、それを研究に組み込む。
- 4) 研究内容の妥当性と評価を行なう。

とくに3)の問題点の解決とアイデアの育成に当たっては、さらに次のような段階を踏む必要がある。

- イ) 研究対象の実態を正確に把握して、研究に取り入れる。
- ロ) 従来の考え方にとられず自分の頭で考える。
- ハ) 関連分野（経済学、生態学、数学、工学など）の成果を導入する。

ニ) 壁に突き当たった場合には、冷却期間を設ける。
 このような過程を経て、研究の独創性が生まれるのである。

高阪の述べている手続きは月並であり至極もったもなことであるが、自己の論文作成への過程を公開したこと、自分の頭で考えることの重要性を指摘したことに大きな意義がある。更に加えれば、論文を書くに当たっては、問題設定の意義を十分議論したり、研究方法の吟味、本論での厳密な実証に基づく論理的展開、発見した事実に基づく独創的な思考が結論を導く過程で必要となる。次に、筆者の研究領域である人文地理学に限って、研究の典型的なデザインを L. S. Bourne の図にならって考察してみたい¹⁰⁾。

デザインの構成要素を示した図は論文を構成するに必要な序論、本論、結論の中味を示した

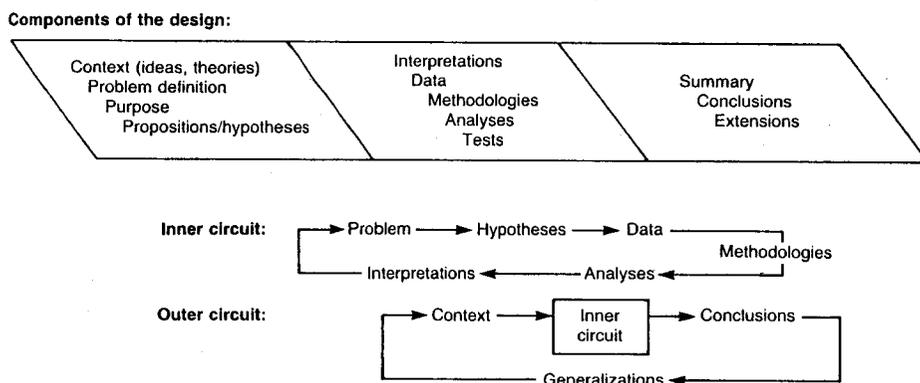


図1 人文地理学における研究デザイン (L. S. Bourne原図)

ものであり、よく知られた事実である。ここで興味を引くのは、論文を書き進めるにあたり、何回もフィードバックを繰り返す思考過程を示した下の図である。すなわち、思考の外的回路としては、先行理論なりアイデアから発するコンテキスト（文脈）があり、後述する内的回路を経て結論に至る。次に、結論を基に一般化を試みても、またコンテキストを検討して内的回路を吟味し、結論を見直すという、フィードバックを限りなく繰り返す思考過程に注目したい。内的回路に関して、問題のテーマを決めた後、仮説をたてデータ・資料を集める。仮説をたてるに当たっては、既知のものを基に未知なるものを予想することが、研究の積み重ねの意味でも必要である。そのデータ・資料をどう処理してゆけばよいかで、さまざまな方法論の中から適切な方法論を選択して分析することになる。その際、適切な方法論が見つからなければ、新たな方法論を提示しなければならない。次に、分析された結果をさまざまな角度から解釈を加え、それによって問題設定の手直し、ないし一部修正へと進む。問題の設定が変更すれば、当然仮説も修正せざるを得ず、必要なデータ・資料も新たに加えるか、全くの再検討を迫られることになる。かくして、内的回路に関して、限りなくフィードバックが続くのである。

この検証の無限性という問題も、仮説の内容が普遍性を持つかどうかに関連するのである¹¹⁾。研究構想の段階でも、外的回路でのフィードバックは必要であるゆえ、書き上げる段階でのフィードバックも相当なものがあつたことになろう¹²⁾。いわば無限のフィードバックを経た論

文こそ、序論から本論、結論へと精緻な論理構造を持つ独創的な論文となりうるのである。よく言われる如く、序論が最後に書くべき性質のものであるのは、実は以上の論述からも明らかであろう。

2・2 論文の十分条件

論文の中ではただ叙述してゆくのではなく、科学的説明が求められるのも当然である。図2はD. ハーヴェイの述べる科学的説明へのルートを示した図である¹³⁾。現実世界の構造イメージから出発し、イメージの形式的表現である先天的モデルを考え、仮説を立てる。次に、定義・分類・測定のための実験計画を樹立し、データを集める。そのデータを統計的検定を用いながら検証した後、失敗すれば現実世界の構造イメージまでさかのぼって同じ手続きを繰り返す。検証の手続きが成功すれば、法則化・理論化をめざし、科学的説明が成立すると考えるわけである。

さて、あらゆる科学は経験の様相から始めて帰納の様相へ、次に理論的・演繹の様相を経て公理の様相へと進んでゆくものである。その際、科学的方法とは、既存の理論に対する懐疑・批判から出発し、仮説をたて、それを検証ないし反証しつつ法則を出し、理論化へもってゆくこととするのである。次に、Johnston, R. J. の『Philosophy and Human Geography—An Introduction to Contemporary Approaches—』の中から、本稿に関連する点について、いくつか抜書きしてみたい。

問題となるのは、科学についての実証主義的概念であり、自然科学の哲学や方法論が人文地理学的に有効に使用しうるかどうかに関してである (P.13)。

仮説とは、まだ真実とは受け入れられていない所説であって、その真偽の程は証拠の提出によって確かめられなければならない (P.14)。

仮説例： X地の上空を台風が通過すれば、いつも雨が降る (P.15)。

実証例： 確率から述べても、この仮説は実証性が乏しい (P.16)。

あらゆる理論は相対的なものであり、よりベターな理論によって常に代替可能なものである (P.17)。

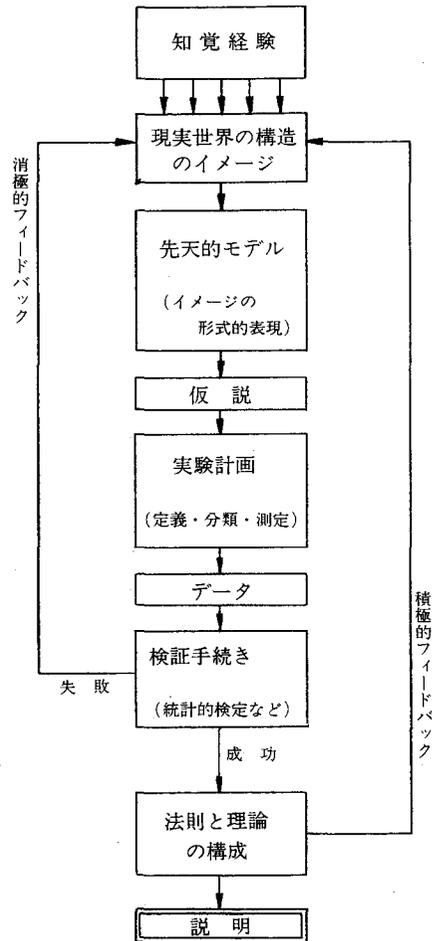


図2 科学的説明 (D. ハーヴェイ原図)

科学者にとって要求される規範とは、オリジナリティー、共有性、無心、普遍性、組織的懐疑主義である（P.17）。

多くの事象の母集団は無限に大きいために、仮説の検証はいくつかの事例に基づいて行われるにすぎない（P.21）。

以上の点について、ここで改めて論議するまでも無いことであるが、研究者にとって方法論を持ち、仮説を樹立することの必要性、しかも検証の限界性を物語っていよう。すなわち、多くのデータ・資料をそろえて検証したつもりになっけていても、実は仮説にとどまっていることの方が多いのである。次に、仮説から検証し、結論を導き出した例を、筆者の拙ない研究例で図式的に説明したい。無論、ここに仮りそめに出された結論が、仮説にとどまっている点を認めるのにやぶさかではない。

2・3 若干の研究例の提示

修士論文では、集落を構成している農家と耕地の関係を、特に耕地の分散・細分に視点をあわせて論じた後、次のような仮説をたてた。研究の方法は、一筆ごとに耕地を図化することにより、耕地の島、*ilot de culture*（団地）の統計的な明細書を作成した。

仮説： 同じく耕地が分散・細分されているといっても、農家の社会的関係によって、その程度に差異がみられるであろう。換言すれば、現在の耕地の上に、かつての農家の社会的関係が反映されていないだろうかということである。しかしながら、散居集落と集居集落では同じ

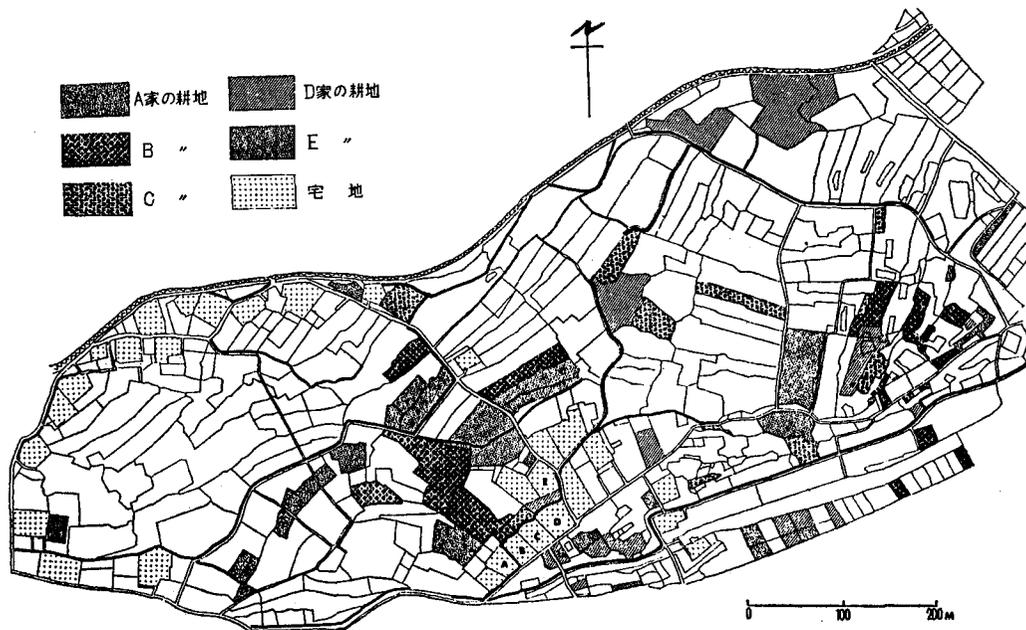


図3 集居農家とその耕地

藤枝市役所，土地家屋名寄帳（昭和41年）による。この範囲におさまらない団地もある。（大嶽原図）

ように言えるであろうか。以上の二点を明らかにすることにより、農業景観を構成する要素の一側面、社会現象の地表への投影を解明したい。

集居集落の事例に関し、検証の一部を図で示す。ちなみに、A家は分家、元小自作、B家は本家、元小自作、C家は元小作、D家は本家、元自作、E家は本家、元地主兼自作である。自小作の別は農地改革以前の土地所有階層である。フィールドワークを通じて図を作成し、以下のような結論を得た¹⁵⁾。

結論： 本家であり、かつての自己の所有地が多く、旧家であるほど、耕地のまとまり方はよい。一方、かつて自己の所有地の少ない、新しい分家は、耕地の細分化が著るしいことがわかった。耕地の分散については、本家・分家に違いがみられる。

ストラスブール大学に提出した第三期博士論文 *Thèse de Doctorat du 3^{em} cycle* ではアルザスの若干の村落における土地所有と農業経営の規模と形態を論じ、農村における都市・農村関係の一端を明らかにしたが、一部、次のような仮説をたてた。

仮説： アルザスの都市ブルジョアジーはフランスの他の地方と異なり、概して農村の土地所有に対して無関心であったという通説がなされていた。果してその通りであろうか。

研究としては、1660年以後の土地台帳¹⁶⁾を主な資料とし、農村における土地所有の社会的配分の変化を追い、市民的土地所有の存在を明らかにしたことがある。研究方法としては、土地台帳から土地所有者ごとに図4のようなカードを作成した。次に、各村の土地台帳上の3,000筆余りの記載内容を分析しつつ、社会カテゴリーに従ってカードを分類し、各カテゴリーの合計を求めた。原資料の土地台帳を分析するまでは、検証できるかどうか全く予測が立たず不安であったが、数ヶ月して表1のような結果を得て安堵した。

図4 土地台帳よりカード(100×150mm)へ記載する1方法(ジュイヤール方式)

村落名 (Berstett)	年次 (1660)	項目 (土地所有)	筆数、所有面積	
土地所有者名	Jr. Hanns Jacob von Berstett			
小耕区名	Lieu-dit (Mühl Feld)			
普通畑			6	5.75 acker
ぶどう園			5	7.25

単位 acker

以上の如く、仮説を立て、データ・資料を集めて検証をはかっても、うまくいくかどうかは予測しにくいことが多く、不安を伴うものである。文献研究から始めて仮説を立てるまでの時間的経過・エネルギーの消費は研究者によって様ざまであろうが、筆者の場合は少なからぬものがあつた。仮説を立て検証し、結論が導き出されると、コロンプスの卵の感が無くはない。事象が明らかになってしまうと大した結論には見えなくとも、新たな仮説を立て試行錯誤を経て検証に至る過程は必ずしも容易ではなかった。しかし、従来言われていない事象の解明に少なくともアプローチしえたとは思っている。

表1 土地所有面積の社会的配分 (1660年)

	ベルステット	プフェーティスハイム	キーンハイム
ストラスブールの宗教財団	140ha 59a (28.5%)	105ha 77a (23.3%)	41ha 30a (15.4%)
その他の村落の宗教財団	35ha 50ha (7.2%)	37ha 11a (8.2%)	30ha 56a (11.1%)
ストラスブールのHôpital*	49ha 68a (10.1%)	26ha 52a (5.9%)	18ha 61a (6.8%)
その他の都市のHôpital	—	—	3 ha 68a (1.3%)
領 主	50ha 05a (10.1%)	17ha 14a (3.8%)	37ha 62a (13.7%)
貴 族	75ha 14a (15.2%)	14ha 17a (3.1%)	6 ha 02a (2.1%)
ストラスブールの市民	17ha 68a (3.6%)	45ha 46a (10.0%)	25ha 71a (9.4%)
その他の都市の市民	8 ha 06a (1.6%)	2 ha 69a (0.6%)	3 ha 98a (1.4%)
在 村 貴 族	17ha 60a (3.5%)	—	—
地元の村落居住者	49ha 54a (10.0%)	68ha 71ha (15.2%)	59ha 55a (21.8%)
その他の村落の居住者	23ha 08a (4.7%)	79ha 51a (17.5%)	18ha 35a (6.7%)
共 有 地	4 ha 86a (1.0%)	3 ha 58a (0.8%)	5 ha 88a (2.1%)
所有者なしcaduc	15ha 63a (3.2%)	3 ha 20a (0.7%)	16ha 88a (6.1%)
分類できないもの	6 ha 50a (1.3%)	49ha 53a (10.9%)	5 ha 79a (2.1%)
合計	493ha 91a (100%)	453ha 39a (100%)	273ha 93a (100%)

* Hôpitalとは原義的には賓客を受け入れる建物であったが、しだいに旅行者や特に巡礼が無料で泊れる施設となった。17世紀末になると、大都市には一般施設院が作られ、全ての乞食が収容された (Pierre George編 : Dictionnaire de la Géographie, 1970による)。

資料：バ・ラン県立古文書館保管の土地台帳より筆者作成。

3. お わ り に

本稿は人文地理学における論文作成への一つの思考方法を、初心者向けに出来るだけ具体的に考察してみたものである。というのも、深く考えることもなしに、機械的にあるテーマを調べて報告を書きまくるといった当今の風潮に対し、論文作成が本来備えておくべき思考手続きについて論ずる必要性を覚えたからである。しかしながら、仮説から検証へ、またフィードバックを通じて仮説検証を何回も繰り返す思考手続きは、効率化と量の要求される今日のスピード社会には合っていないかもしれない。また、序論でも指摘したように、少ないポストをめぐって過当競争を繰り返している時に、本稿での論議は悠長に思えるかもしれない。というのも、Peter Gouldの述べる如く、大学でよく訓練され、むち打たれた馬のように感じて卒業しても

不思議ではない¹⁸⁾し、その後もがむしゃらに走り続けることが競争場裡において必要であるからである。仮に、その現実を認めるとしても、論文作成において最も大事なことは、従来言われていないことを考え出すか、通説を論破することであり、しかも内省的立場において考えることである。それも次のようにならぬよう自戒するためである。

「地理学者による学術的著作が、他の分野におけるものと同様に、次第に心を奪わなくなりつつあり、一般の人々に受け入れられなくなっているのは驚くべきことではない。それらの著作は機械的であり、生き生きとしていないことがしばしばである¹⁹⁾」。

地理学の著書・論文をまとめる際に、ごく限られた数だけの専門家を相手にするのではなく、不特定多数の読者をも想定して書くことの必要性を述べていよう。本稿は、人文地理学における論文作成への一つの思考方法を簡略に述べたものであるが、本論での論議は他の個別科学でも多かれ少なかれ実行されている思考手続きであろうと考える。明らかにされた事実がレンガを積み如く次第に強固に構築される学問分野と異なって、次々と流行の変る人文地理学の研究動向を反省し、本稿を草した次第である。

本稿は現職教員を中心とした国立教員養成大学大学院の一つである上越教育大学において、院生を研究指導する過程で思案されたテーマであり、多くの方々からの御啓発と学恩に負うものであることを最後に記すと共に、感謝申し上げたい。

注

- 1) この点に関しては、下記の著作における先学の発言は貴重であり、詳しくは同書を参照されたい。

Anne Buttner 『The Practice of Geography』 Longman, 1983, 298p.

谷岡武雄『地理学者への道』 地人書房, 1973, 199p.

竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』 古今書院, 1986, 379p.

なお、竹内啓一は論稿の中で、「小学校あるいは師範学校在籍の頃から地理学を専攻しようと考えていたなどというのはむしろ例外で、ほとんどの場合、大学に入る段階で、あるいは京大の場合は大学2年になる段階で地理学を選んでいる」(p.316)と述べている。

竹内啓一「地理学者の夢と現実」一橋論叢第95巻第3号, 1986, pp.311~326

- 2) 地理学における専門の細分化に関し、能 登志雄は既に次のように指摘している。

「地理学を学ぼうとする人々の多くが、その学習の初歩の段階から専門をいい立てて、それを次第に細かく分割していったその針の先ほどに限った範囲の中で権威者になろうとする弊風が、近ごろとくに強くなっているように思われる。地理という学問はもともとそんな学問ではなかったはずなのである」(p.61)。

能 登志雄「Master in Nothing」西川・河辺・田辺編『地理学と教養』所収, 古今書院, 1971, pp.59~62

- 3) 大嶽幸彦「江戸時代後半における2人の旅行者の地理思想——橋 南谿と古川古松軒の旅行記を中心に——」神戸大学教養部紀要28号, 1981, pp.35~48

大嶽幸彦「幕末前後における2人の先覚者の地理思想——吉田松陰と福沢諭吉の旅行記を例

として——」歴史地理学122号, 1983, pp.15~20

大嶽幸彦「19世紀前半における2人の「地理学者」の観察眼——スタンダールとゲーテの旅記を中心に——」細井淳志郎先生退官記念論文集出版事業会編『地域をめぐる自然と人間との接点』所収, 1985, pp.89~98

大嶽幸彦「人間主義の地理学に関する覚え書き」地理学評論第61巻第1号, 1988, pp. 49~57

- 4) 西川 治編著『人文地理学』旺文社, 1982, P.184
- 5) 大嶽幸彦『国際化時代の地理学』大明堂, 1980, P.11
- 6) 西川 治「地理学の開明的役割と地泰学」地理学評論第62巻A-11号, 1989, P.769
- 7) 関口 武「気候学の悩みと進歩」東京教育大学地理学研究報告XXI, 1977, P.131
- 8) 鈴木隆介「地形学の最終目標」三野与吉先生喜寿記念会編『地理学と地理教育』所収, 古今書院, 1981, P.117
- 9) 高阪宏行「小売システムの分析——モデル, 動態, 制御——」人文地理39巻1号, 1987, P.80
- 10) M. S. Kenzer, ed. 『On becoming a Professional Geographer』Merrill, P. C., 1989, p. 103
- 11) R. J. Johnston 『Philosophy and Human Geography』Edward Arnold, 1983, P. 22
- 12) 筆者の個人的体験を書いて恐縮であるが, 恩師の尾留川正平先生は, ある時, 原稿を9回書き直されたことがあるとお聞きしたことがあるし, 博士論文の御指導を受けた際にも3回書き直しをさせられた記憶がある。
- 13) ディヴィッド・ハーヴェイ著・松本正美訳『地理学基礎論』古今書院, 1979, P.35
- 14) 前掲11)pp.11~18
- 15) 大嶽幸彦「藤枝市の農村部における耕地の分散・細分と農家の社会的関係」地理学評論第42巻6号, 1969, pp.376~389
- 16) 1660年の土地台帳は虫食いのほとんどない古文書であっても, 300年前の筆記体はドイツ語で書かれていたので, 当初読めそうもなかった。アルファベット1文字につき, 20~30近くある筆記癖の1つを見つけ出した上, 綴りの1つ1つを解読するといった, 時間と根気のいる作業を続けたのである。言わば, 土地台帳の解読こそが資料化・データ作りへの大仕事であった。
- 17) Ohdaké, Y. 「L'évolution des propriétés des exploitations agricoles et des parcellaires de quelque villages du Kochersberg (1660~1953)」Thèse de 3^{em} cycle (Doctorat en Géographie), dactylographiée, Univ. de Strasbourg, 1971, 83 P.
大嶽幸彦「アルザスの若干の村落における土地所有の社会的配分 (1660~1953)」地理学評論第45巻8号, 1972, pp.561~575
- 18) P. Gould「Will geographic self-reflection make you blind?」R. J. Johnston, ed. 『The Future of Geography』Methuen, 1985, P. 279
- 19) 前掲10)p. 114

A Method of Thought leading to a Thesis in Human Geography

Yukihiko OHDAKE

ABSTRACT

The object of this research is to consider a procedure or a method of thought necessary for preparing a thesis in human geography. It is believed that the most important point in conclusion of the thesis consists in the new assertion which has never been mentioned before, or the refutation against the theory which has been commonly accepted. Therefore, it requires the procedure of thought which repeats the process of "from hypotheses to verification" by means of feedbacks. The Author has discussed this problem as the main subject by referring to some examples.